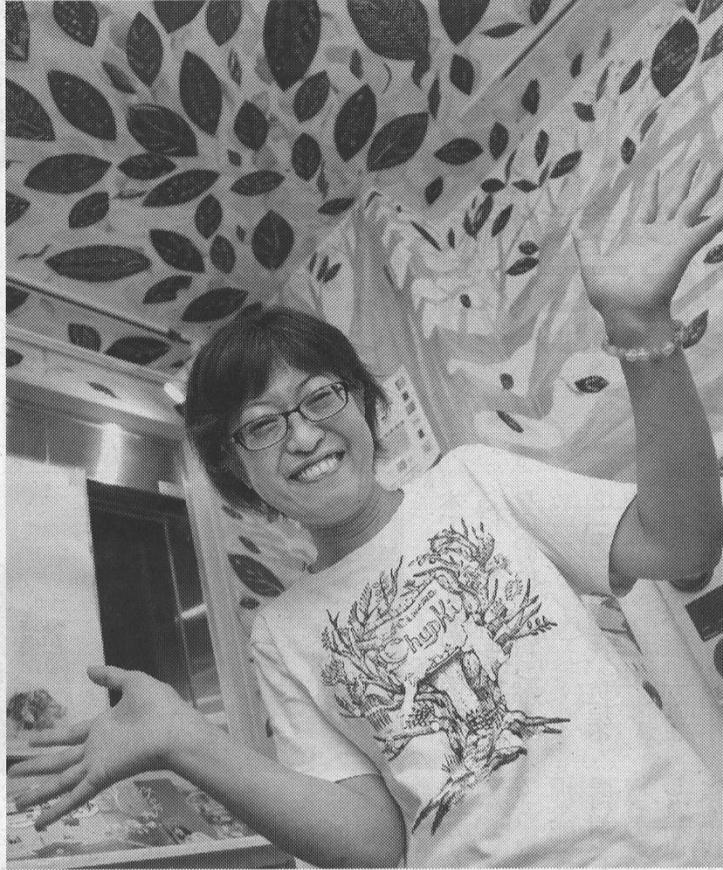


# つながるひろがるフェミ・ジャーナル ふえみん



チュブキ（アイヌ語で「自然の光」）に包まれるような館内。「葉には、寄付してくれた人の名前を書きました。いろんな人が関わって、一人じゃできないことができる。人に望まれることをやっているから、守られていくと思う」

シティ・ライツの仲間たちの  
寄付で1500万円。クラウド・ファンディングで300万円を補い、16年、シネマ・チュブキ・タバタは開館した。草の根精神で、できることは何でもやっている。駅まで迎えに行ったり、座つて見られない人には、2階の事務所で寝たままだから、仲間に伝えていいですか」と喜ばれた。親子を想定していた個室は、感覚過敏の発

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL *femin* ふえみん婦人民主新聞 No.3297 2021/09/15

毎月5, 15, 25日発行

contents

- 2 性犯罪の「刑事法検討会」報告書が公表される
- 3 「死なせてあげる」ことがいいことか?
- 4 東京オリンピック開催の影で 障害者施設でのクラスター
- 5 連載 海の向こうの女たち⑯ パレスチナ〈前編〉
- 6 film 『ミッドナイト・トラベラー』

## 日本で唯一のユニバーサル映画館

シネマ・チュブキ・タバタ代表 平塚千穂子さん Hiratsuka Chihoko

東京・JR田端駅から徒歩5分。シネマ・チュブキ・タバタは客席20ほどの小さなけれど大きな夢を抱う、日本で唯一のユニバーサル映画館だ。目の見えない人・見える人、耳の聞こえない人・聞こえる人、車椅子の人、泣く子と一緒にのお母さん。誰もが一緒に映画を楽しめる。

「日本で唯一」のは、上映作品すべてが音声ガイドとバリアフリー字幕対応である。その制作に、代表の平塚千穂子さんやボランティアスタッフが日夜励んでいる。

見えない人は客席のイヤホンから「平たい顔の男が」と解説を聞き、聞こえない人は、「そのとき一発の銃声が」とバリアフリー字幕で想像を広げる。「目の見えない人は、かすか

な衣擦れの音で人の動きを敏感に察知するから、余計な解説は要らなかつたり。彼らの立場に立つことで、映画の本質は想像力だと実感します」

20代後半の頃、平塚さんは映画に救われた経験がある。それがすべての始まりだった。

「失業と離婚が重なり、親には顔向けできない、友達にも会いたくない。罪悪感と先が見えない不安で、ぼうっとするのさえつらい時期に、ふらつと映画館に入つたんです。入れ替え

う」「ミニユニティーが生まれた。とにかくできることから始めたら、潰すわけにはいかない」

「シティ・ライツの仲間たちは、奉仕というより、『面白い

から、この映画見て』という接

し方。そのフラットな関係が、障がい者にも楽なんですね。あ

ねてカルチャーショックを受けた。みんな、おしゃべり好きで会話のスピードが速く、言葉遊びが上手。「こういう言葉と文化を持つ人たちなら音で映画を楽しめる」と確信した。

「劇場で皆と同じタイミングで笑えた」と歓喜する人もいれば、胸のつまる話もあった。「目の見えない母親を気遣つて『映画を見たい』と言えないでいた娘さんと、大手映画会社が開発した音声ガイド・アプリのおかげで初めて映画館に行つた方がいい。その方が、見終え娘さんに『あのシーンはどういう気持ちだったのかな』と聞かれ、そういう会話ができることに感激して涙がこぼれた」と

じつは平塚さんは教育学部の出身だ。「この活動も教育の一環かもしませんね。想像を超えることができると、縛られていた観念からぱっと外に出られる。そういうことが積み重なつていけば、もっと生きやすい社会になると思います」

達障害の人にも重宝されている。本当にいろんな人がいる。経営はむろん楽ではない。寄付に大きく支えられている。「そうした事業運営があつてもいいのかな、と思います。た

2001年、視覚障がい者向けの映画鑑賞推進団体、シティ・ライツ（街の灯）を設立。目的の見えない人と映画好きが集

いて。その方が、見終え娘さんに『あのシーンはどういう気持ちだったのかな』と聞かれ、そういう会話ができることに感激して涙がこぼれた」と

無理と思っていたことが可能になる。その手ごたえの中で、平塚さんたちの思いも膨らんだ。「常設館を作りたい」

だから、仲間に伝えていいで

すか」と喜ばれた。親子を想定

していた個室は、感覚過敏の発

達障害の人にも重宝されている。本当にいろんな人がいる。経営はむろん楽ではない。寄付に大きく支えられている。「そうした事業運営があつてもいいのかな、と思います。た

だ、みんなの夢を背負っているから、潰すわけにはいかない」

その夢はボランティア・ス

タッフ自身のものもある。

「シティ・ライツの仲間たちは、奉仕というより、『面白い

から、この映画見て』という接

し方。そのフラットな関係が、

障がい者にも楽なんですね。あ

ねてカクテルショックを受けた。みんな、おしゃべり好きで会話のスピードが速く、言葉遊びが上手。「こういう言葉と文化を持つ人たちなら音で映画を楽しめる」と確信した。

「劇場で皆同じタイミングで笑えた」と歓喜する人もいれば、胸のつまる話もあった。「目の見えない母親を気遣つて『映画を見たい』と言えないでいた娘さんと、大手映画会社が開発した音声ガイド・アプリのおかげで初めて映画館に行つた方がいい。その方が、見終え娘さんに『あのシーンはどういう気持ちだったのかな』と聞かれ、そういう会話ができることに感激して涙がこぼれた」と

じつは平塚さんは教育学部の出身だ。「この活動も教育の一環かもしませんね。想像を超えることができると、縛られて

いた観念からぱっと外に出られる。そういうことが積み重なつていけば、もっと生きやすい社会になると思います」